

中央区森ノ宮中央一丁目における
森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査(MR12-2)完了報告書

1) 調査の経過

調査地は玉造筋の西側に位置し、上町台地東縁の裾部に当る(図1)。森の宮遺跡が西日本屈指の縄文時代後・晩期の遺跡として知られる端緒となったMR3・4次調査地は北西へ130mの位置にあり、本調査地はそこから地形的にさらに下ったところにある。周辺で行われた既往の調査として、北130mに位置するMR94-8次調査では、豊臣期の整地層や中世の耕作土のほか、古代の祭祀関連の溝が見つかっており、縄文時代中～晩期の遺物も出土した。北120mに位置するMR94-6次調査では奈良時代の流路が確認され、堆積層から墨画のある須恵器や銀装刀子が出土した。また、南側180mのMR85-3次調査においても道路の側溝とみられる古代の遺構が確認されている。本調査地から玉造筋を挟んだ東側でも調査事例は漸増しており、南南東180mのOS94-20次調査では豊臣期や弥生時代の遺構が検出され、OS10-9次調査では縄文から近世末までの地層堆積状況が明らかになっている。東の80m OS12-6次でも豊臣期から徳川期の盛土層が認められた。以上のことから、調査地一帯は豊臣期から徳川期にかけて大規模な整地が行われたとみられ、その下位の地層からは古代から中世の遺構や遺物が見つかる。さらに、一部で弥生時代の遺構も確認されていることから、この時期に陸地化が進んでいたことも明らかとなっている[大阪市文化財協会1994・1996・2002、大阪文化財研究所2011・2012a・b]。

今回の発掘調査に先立って平成24年7月19日～23日に調査地の南北2箇所において試掘調査(MR12-1)が行われた。その結果、中世以降の安定した地層の堆積を確認することができた。これにより中世以降の遺構分布と遺物の包含状況、さらにそれ以前の遺構・遺物の有無を確認するため、本格的な発掘調査を実施することとなった。

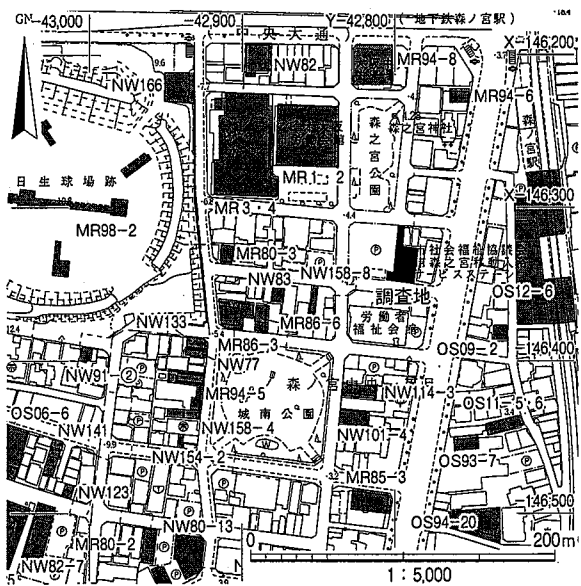


図1 調査地の位置

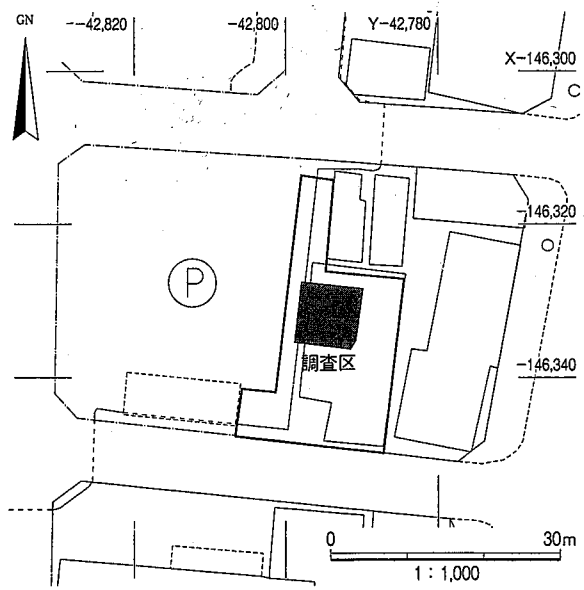


図2 調査区位置図

発掘調査は平成24年12月5日から着手した。調査地のほぼ中央において、北側の試掘墳(1区)を取り込むように東西8m、南北8mの64㎡の面積で調査区を設定した(図2)。重機掘削により現代盛土を掘削したのち、以下を人力で掘削し、適宜、遺構面の精査と遺構の掘下げを行いながら、併せて必要な実測や写真撮影などの記録作成を行った。最終的にGL-3mまで調査を行い、12月25日から埋め戻しを開始して12月26日に現地におけるすべての作業を終了した。

本文で使用する方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+〇mと表記する。

2)調査の結果

i)層序(図3)

調査地は平坦で標高はTP+4.2m前後であった。現地表からTP+1.2mに至る深さ約3mの範囲で、現代盛土層を含め以下の第0～9層を確認した。

第0層は現代盛土である。層厚は100～120cmであった。

第1層：調査区全域において認められた作土層で第1a～1c層に細分できた。第1a層は暗灰黄色(2.5Y4/2)の細粒砂混り粘土質シルト層、第1b層は暗褐色(10YR3/4)の粘土混り細粒砂質シルト層、第1c層はオリーブ黒色(5Y3/2)の粘土混り細粒砂質シルト層で、いずれも盛土起源の作土である。第1c層は北東側のみで認められた。層厚はそれぞれ10～20cmであった。出土遺物から、本層は近世後半から近代にかけて形成されたとみられる。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)の粘土質シルト層の整地土である。調査区全域で認められ、層厚は10～30cmであった。下位層の第4・5層に由来する数cm大の偽磔を多量に含んでいた。本層には18世紀後半の遺物が包含されていた。

第3層：明黄褐色(2.5Y3/6)の細粒砂層である。層厚は5～10cmで、調査区の全域に分布していた。ラミナは認められないが、淘汰がよく水成層とみられる。

第4層：灰オリーブ色(7.5Y6/2)の粘土質シルト層の整地土である。調査区の西半に厚く分布しており、東方に向って薄く部分的に堆積していた。西半で層厚は15～25cmであった。

第5層：調査区全域に厚く堆積した整地土である。部分的な整地も含めて複数の整地層で構成されるが、およそ上下2層の単位に区分することができる。出土する遺物はともに豊臣前期が主体をなす。上位の第5a層は灰色(5Y4/1)の炭・木片を多く含む粘土混り中粒砂質シルト層で上部の数cm程度で土壌の生成が認められるところがあった。層厚は20～40cmであった。下位の第5b層は黄褐色(10YR5/4)のシルト質中粒砂層で、層厚は20～50cmであった。第5a・5b層のそれぞれの上面では土壌や小穴などの遺構が認められた。

第6層：おもに調査区の北半に堆積した作土層である。第6a～6d層に細分される。第6a層は調査区の北半で認められた灰色(10Y4/1)の粘土質シルトで、層厚は約15cmであった。第6b・6c層も北半のみに堆積しており、第6b層は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)の砂礫混り粘土質シルト層、第6c層は黄

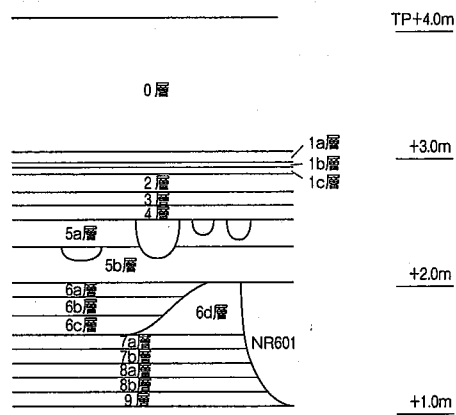
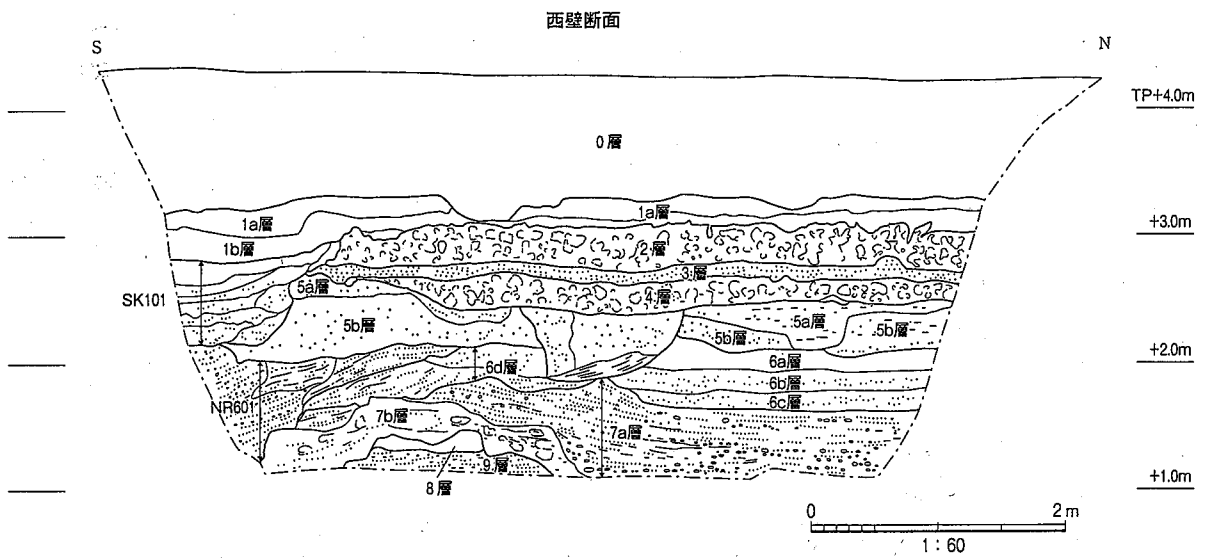
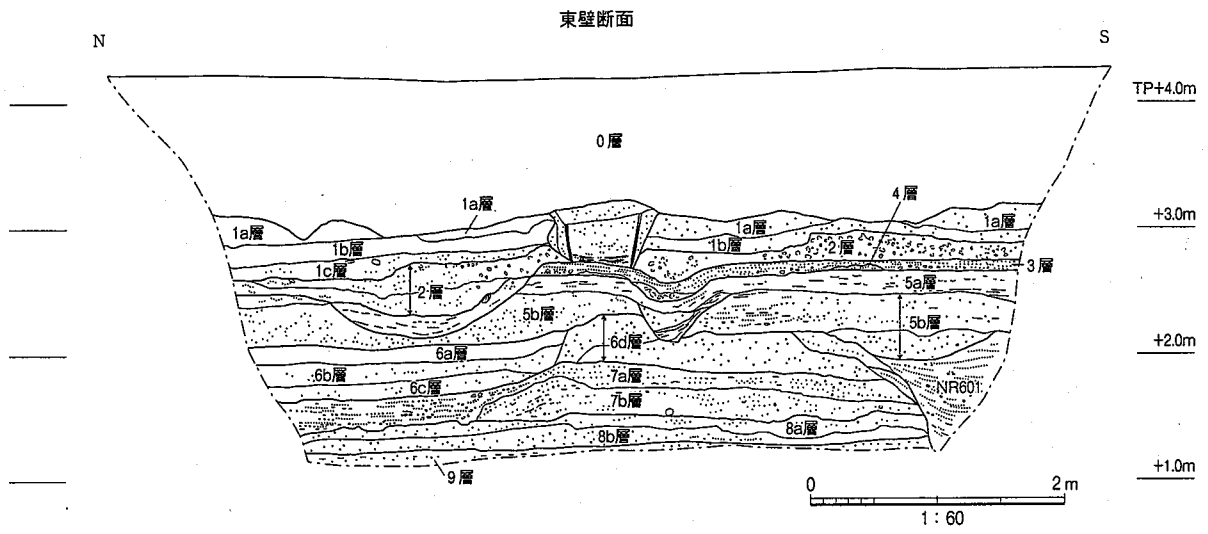


图3 東壁・西壁地層断面図と層序模式図

灰色(2.5Y4/1)砂礫混り粘土質シルト層である。層厚はそれぞれ約15cmであった。第6a～6c層では16世紀を中心とする遺物が出土した。第6d層は粗粒砂が優勢な砂礫混りシルト層で調査区の中央以南に堆積していた。層厚は約30cmであった。第6d層は北側には堆積しておらず、南側から下った段状の傾斜面が形成されていた。第6a～6c層の堆積により、この傾斜面は埋められ、最終的にはほぼ平坦な地形となっている。また、調査区の南端では、西から東へ流れた自然流路であるNR601によって第6d層は側方に侵食されている。

第7層：調査区全域に認められた河川堆積物で第7a・7b層が認められた。第7a層は暗灰黄色(2.5Y4/2)の砂礫層で層厚は50cm以上で、北に向って厚く堆積していた。第7b層は灰色(10Y4/1)の

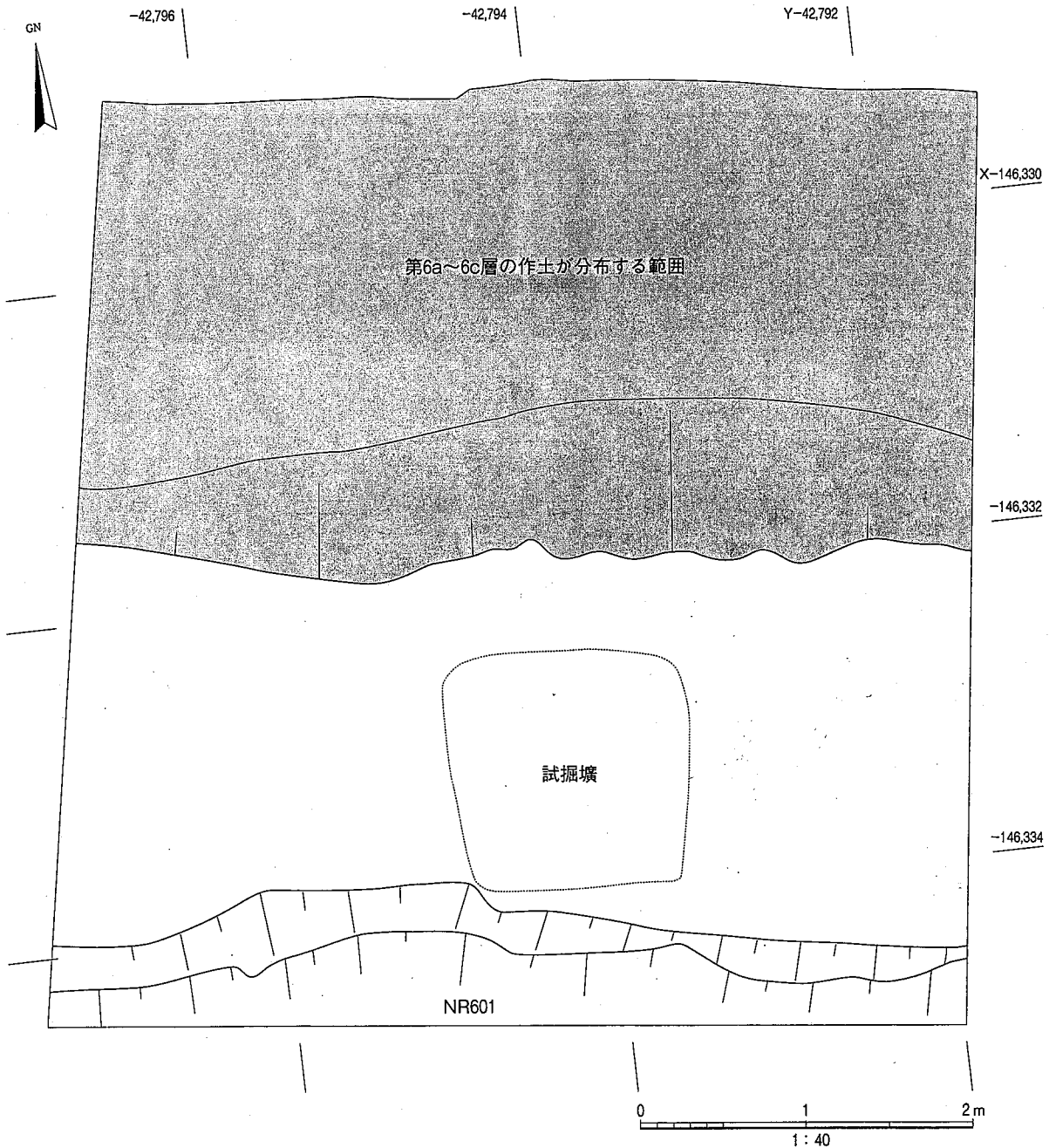


図4 第6層上面遺構

炭・木炭を含む細礫混りシルト質細～中粒砂層で、層厚は30～50cmであった。第7層からは14～15世紀の遺物が出土した。

第8層：調査区の東半に認められた水成層起源の作土層で、第8a・8b層に細分される。第8a層は灰色(10Y5/1)の細粒砂混りシルト質粘土層で、層厚は約10cmであった。第8b層は黒褐色(2.5Y3/2)の細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は約15cmであった。第8層からは古代から中世前半を中心とする遺物が出土した。

第9層：オリーブ灰色(10Y4/7)の中粒砂で構成される水成層である。層厚は20cm以上である。

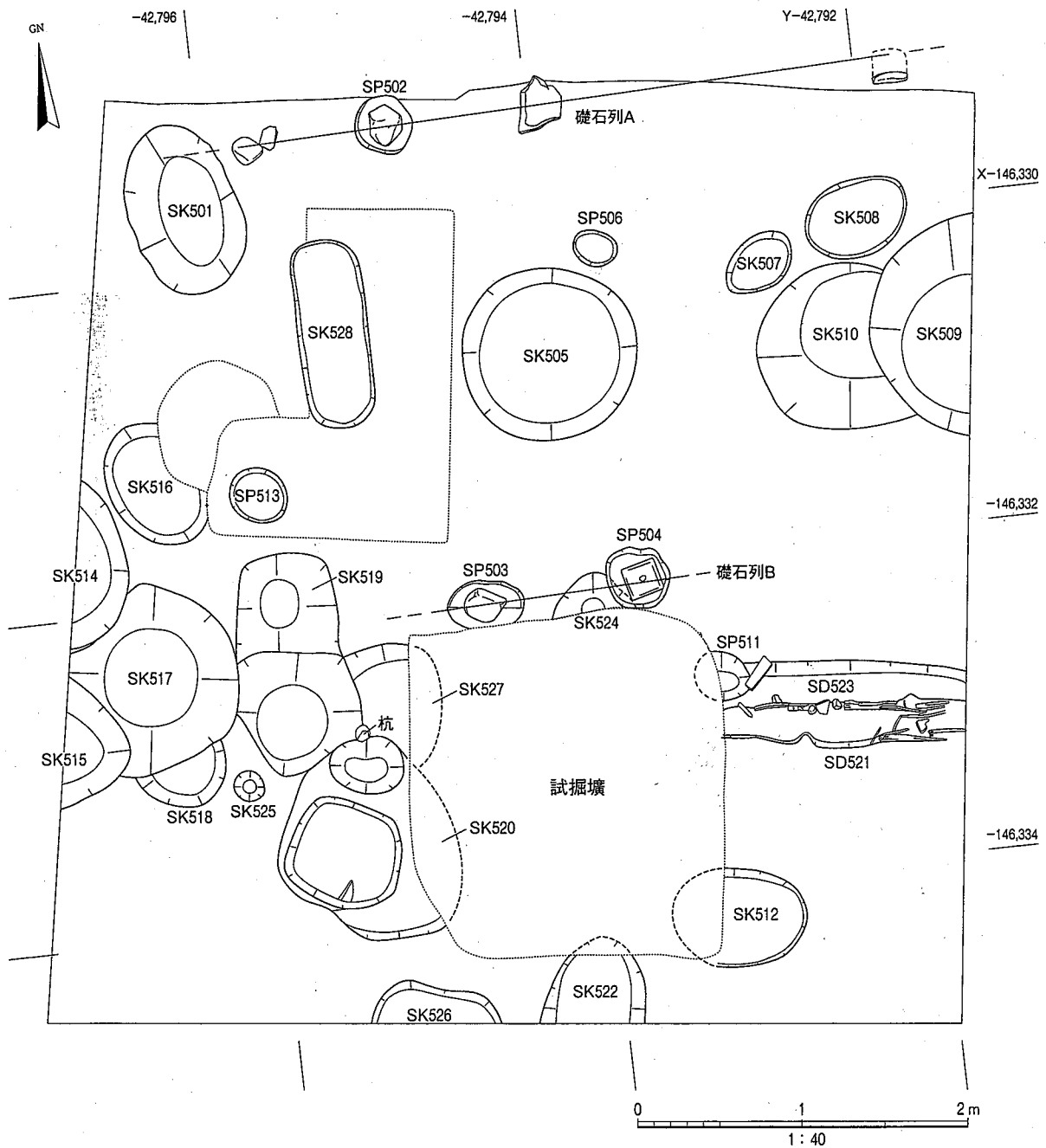


図5 第5層上面遺構

ii) 遺構と遺物

第6層～8層の遺物

第6d層からは土師器・須恵器・瓦質土器・瓦質羽釜・備前焼甕・瀬戸美濃焼天目碗・白磁碗などが出土した。遺物の多くは16世紀後半のものである。第7層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦質羽釜・備前焼甕・瓦器椀・白磁碗などが出土した。14～15世紀の遺物が多い。第8層からは弥生土器・土師器・須恵器・平瓦・灰釉陶器・瓦器椀・土製管状土錘などが出土した。土師器・須恵器杯・高杯・鉢・甕などで古墳時代～古代のものが多い。瓦器椀など中世の遺物は12～13世紀のものが認められた。

第6d層上面検出遺構(図4)

調査区の南端において東西方向の自然流路NR601を検出した。流向は東方向である。幅・深さともに100cm以上である。

第5b層上面検出遺構(図5)

調査区の北西側で南北方向に長い隅丸方形の土壌SK528を検出した。南北110cm、東西40cmで、深さ20cmである。SK528からは平瓦・備前焼甕・瓦器椀・瀬戸美濃焼天目碗のほか、箸・板材・角材などの木製品が出土した。調査区中央東半では東西方向の溝SD521・523を検出した。SD521は溝の両側に板材を立てて樋状となるように補強されており、水路として整備されていたものとみられる。

第5a層上面検出遺構(図5)

第5a層上面において礎石列A・B、小穴SP502～504・506・511・513・525、土壌SK501・505・507～510・512・514・515～520・522・524～527を検出した。礎石列A・Bは東西方向で、いずれも50cmほどの間隔で礎石が配置されている。礎石の多くはSP502～504のような小穴内に据えられていた。また、SP504に据えられた礎石は五輪塔の笠部(火輪)が転用されたもので、平坦な笠部下面が上側となるように置かれていた。礎石列A・Bの間隔は約1.4mであり、両者の方向と礎石間隔が一致していることから、1棟の礎石建物として組み合わせる可能性がある。大半の土壌の埋土には炭や焼土が多く含まれ、瓦・土師器・陶磁器のほか、漆器・箸・板材・角材などの木製品や木屑などが出土した。多くが廃棄土壌とみられる。特にSK501・517・520・527からは土師器・土師器羽釜・須恵器・瓦質土器・青花皿・瀬戸美濃焼天目碗・白磁碗・平瓦・丸瓦や漆塗椀・箸の木製品など多様な遺物が出土した。遺物の殆どは豊臣前期に属する。また、SK519からは金箔押し巴紋軒丸瓦が出土した。

3) まとめ

調査地一帯は上町台地の東縁に位置することから西から東に向って下降する地形である。周辺では弥生時代や古代の遺構が確認されている。今回の調査では古代に遡る地層自体は確認できなかったが、第7・8層で中世前期の遺物とともに弥生土器や古墳から古代にかけての土師器・須恵器・瓦などが多数出土した。したがって、調査地一帯が弥生時代には陸地化し、古代には開発が進んでいたことは確実である。また、第6層において16世紀後半の複数の作土層が認められることから、この時期には耕作地として安定した土地利用が行われていたものと思われる。さらに第5層で認められる豊臣前期の厚い盛土の存在は、この時期に周辺で大規模な土地造成が行われたことを示している。第5a層上面

で検出された遺構群は、金箔押し瓦などが出土したことから、大坂城の築城に関連して形成されたものと思われる。

今回の調査では、中世から近世に至る各時期の遺物包含層と豊臣前期を中心とする遺構を検出した。豊臣前期の遺構の大半は廃棄土壌であり、埋土からは多数の遺物が出土した。漆塗碗や箸などの木製品も多く認められる。このような多種にわたる日常雑器の出土から、この時期には調査地周辺が屋敷地一部として利用されていたことがうかがえる。

引用参考文献

大阪市文化財協会1994、「鵜森宮による建設工事に伴う森の宮遺跡発掘調査(MR94-6)略報」

1996、『森の宮遺跡Ⅱ』

2002、『大坂城跡Ⅵ』

大阪文化財研究所2011、「中央区玉造一丁目540-1ほか12筆における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10-9)報告書」

2012a、「中央区森ノ宮中央一丁目における森の宮遺跡・大坂城跡試掘調査(MR12-1)報告書」

2012b、「中央区森ノ宮中央一丁目における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS12-6)報告書」